様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年　5 月 28 日現在

機関番号：34507
研究種目：　基盤研究（Ｃ）
研究期間：2009～2012
課題番号：21592934
研究課題名（和文）学齢期にある広汎性発達障害児とその母親への心理的支援モデル

研究課題名（英文）　Nursing care model for school-age children with pervasive developmental disorders and their mothers

研究代表者
松岡　純子（MATSUOKA SUMIKO）
甲南女子大学・看護リハビリテーション学部・講師
研究者番号：40375621

研究成果の概要（和文）：広汎性発達障害児をもつ母親の困難や心理的支援のニーズ、広汎性発達障害児の体験する困難に関する母親の認知、学齢期にある広汎性発達障害児との関係構築過程に関する研究結果、文献検討、Rapp & Goscha のストレングスモデルを基盤とし、広汎性発達障害児とその母親を一組の援助対象とした看護援助モデルを考案した。考案したモデルに基づいて、３組の子どもと母親に看護援助を実施し、実践結果及び母親へのインタビューの分析から、発達過程の課題という視点を加え、看護援助モデルを修正した。

研究成果の概要（英文）：
We engaged the study of the difficulties experienced by mothers of children with PDD and their psychological support needs, the study of recognition of mothers of children with PDD about the difficulties that their children experience and the study of process to construct the relationship between the nurse and a child with PDD through home visiting. Through our descriptive studies and literature review, we developed a nursing care model for school-age children with PDD and their mothers, based on the strength model by Rapp & Goscha (2009). We put this hypothetical model into practice with three sets of school-age children with PDD and their mothers. Then we added children's growing process to the nursing model through evaluation of practice and interviews of mothers at the end of practice.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総　計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：精神看護学
科研費の分科・細目：高齢者看護学・精神看護学

キーワード：広汎性発達障害，学齢期，母親，看護援助モデル，精神看護

１．研究開始当初の背景

平成 17 年（2005）4 月から発達障害者支援法が施行され、我が国で初めて「発達障害」が、「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するもの」と定義された。この法に基づいて乳幼児から成人期までの地域支援体制の整備や支援手法の開発、情報提供・普及啓発、専門的人材の養成等の施策が開始された。しかしながら、これらの取り組みは始まったばかりであり、発達障害に関する専門家は少なく、地域における支援体制は整っておらず、様々な困難と不安を抱えて生活する発達障害児とその家族が多く存在すると考えられる。

就学前の広汎性発達障害児は、発達障害者支援センターや療育機関において支援を得ることが可能であるが、学齢期における広汎性発達障害児への支援は、特別支援教育などを含む教育領域が主となる。学齢期の広汎性発達障害児は、環境の変化、集団生活への適応、学習の理解、対人関係などに困難を経験している可能性がある。学校で体験する様々な出来事による心理的影響は子どもの生活全体に及び、また子どもが生活全体で経験することによる心理的影響は学校生活に及ぶので、子どもの生活全体をとらえた心理的支援が重要である。そこで看護職の視点から、学齢期の広汎性発達障害児の生活全体を捉えた心理的支援モデルを開発することに意義がある。

障害児をもつ母親が経験するストレスは大きいと言われている（田中，1999，石崎，2001）。発達障害児の母親に関する研究は少なく、その実態はまだ十分明らかではないが、子どもの行動特徴による育てにくさから育児ストレスと感じていることが明らかにされている（刀根，2002）。広汎性発達障害児の母親への心理的支援の報告はほとんどなく、広汎性発達障害を含む知的障害児をもつ 4 家族に介入した研究において、家族の悲哀感情は障害を受容した後も継続すること、悲哀感情の表出が対処行動を導いたと報告されているのみである（入江，2006）。広汎性発達障害児の親は、就学前に大きなストレスを感じ、支援を必要としている（Whitaker, 2002）。子どもを取り巻く環境が大きく変わった就学後においても、親は子どもの状況を心配していると考えられるが、それに対する心理的支援の実践はほとんど報告されていない。また学齢期の子どもにとって母親の関わりや心理状況が与える影響は大きく、母親が必要とする適切な心理的支援を得て安定していることは子どもにとっても重要である。これらのことから子どもと暮らす母親自身に焦点をあてた心理的支援モデルを開発することに意義がある。

学齢期の広汎性発達障害児とその母親への心理的支援モデルを開発することに取り組みたいと考えた。

２．研究の目的

学齢期にある広汎性発達障害児とその母親への心理的支援モデルを開発することを目的とする。

３．研究の方法

学齢期にある広汎性発達障害児とその母親が感じる困難や必要とする心理的支援の実態、広汎性発達障害児の体験する困難、広汎性発達障害児との関係構築過程、訪問による支援の効果などについて知ることは心理的支援モデルの開発において必須である。

そこで、一つ目の研究では、広汎性発達障害児をもつ母親が体験する困難や心理的支援のニーズの実態を明らかにする目的で、小児科や児童精神科などの専門機関において広汎性発達障害と診断を受けた子どもをもつ母親 10 名を対象とし、半構成的インタビューを実施した。インタビューは許可を得て録音し、逐語化した。得られたデータは、質的帰納的に分析した。

二つ目の研究では、広汎性発達障害児が体験している困難に関する母親の認知を明らかにすることを目的とし、広汎性発達障害児をもつ母親10名に半構成的インタビューを実施した。インタビューは許可を得て録音し、逐語化した。得られたデータは、質的帰納的に分析した。

三つ目の研究は、学齢期にある広汎性発達障害児の理解を深め、関係構築過程を明らかにし、効果的な援助方法への示唆を得ることを目的として、家庭を訪問し、子どもと勉強や遊びを通して１回約１時間程度の関わりをもった。訪問時の子どもと研究者の様子をビデオに録画し、また訪問時の印象的なかかわりや研究者の気づきを訪問後にノートに記録した。事例ごとに、ビデオ及びフィールドノートの記録を分析し、関係構築の過程や子どもの変化について明らかにした。その後、３事例の共通点と相違点を検討した。

これらの研究結果及び文献検討を基にして、学齢期にある広汎性発達障害児とその母

親への看護援助モデルを考案した。

このモデルに基づいて、数組の学齢期にある広汎性発達障害児とその母親に看護援助を実施した。そして、実践結果及び看護援助終了時に実施した母親へのインタビューの分析を通して、看護援助モデルを修正・精錬した。

４．研究成果

まず、広汎性発達障害児をもつ母親が体験する困難や心理的支援のニーズに関する研究の結果、学齢期の広汎性発達障害児をもつ母親は、乳幼児期から継続する困難に加えて、学齢期特有の困難を日々の生活の中で体験しており、広汎性発達障害の特性と心理的支援に関する知識と技術を併せ持つ専門家による支援や、母親への支援と共に子どもの強みに焦点を当てた子どもへの支援を提供することの必要性が示唆された。

次に、広汎性発達障害児が体験している困難に関する母親の認知を明らかにする研究の結果、母親は子どもが困難を言語化できないために、子どもが体験している困難がわからないと感じており、特に子どもと離れて過ごす時間が増える学齢期において不安が高まることが明らかになった。

また、学齢期にある広汎性発達障害児との関係構築過程に関する研究の結果、訪問を重ね、子どもの個性や興味に合わせた関わりを工夫することによって、子どもの笑顔・発語・研究者とのアイコンタクトが増え、活動に集中して取り組み、身体的な距離が近くなる等の変化が起こっていた。また母親に対しては、研究者の訪問によって、心配ごとを話す機会及び子どものできることや成長・発達を共に確認する機会をもつことができ、心理的安定を得ていたことが示された。

これらの研究結果、文献検討、Rapp & Goschaのストレングスモデルを基盤として、学齢期にある広汎性発達障害児とその母親を援助対象とした看護援助モデルを考案した。

看護援助モデルは、学齢期にある広汎性発達障害児とその母親を一組の対象とした。そして看護援助モデルが目指す成果は、学齢期にある広汎性発達障害児とその母親の生活の質、生活の満足、有能感、自信、安心感、希望の獲得あるいは向上であった。看護援助モデルは①関係性の構築、②アセスメントと目標設定、③看護援助によって構成された。

考案した看護援助モデルに基づいて、３組の学齢期にある広汎性発達障害児とその母親を対象として、月１回程度の訪問を継続しながら、事例ごとの目標を目指して看護援助を約６カ月間、実施した。この実践結果及び6カ月の実践終了時に行った母親へのインタビューの分析から、子どもの発達過程の課題という視点をモデルに組み込む必要性が示唆された。この検討に基づいて、看護援助モデルを修正した。

本看護援助モデルでは、広汎性発達障害児の学校生活だけでなく生活全体を支えるという視点をもつこと、広汎性発達障害児と母親を一組の援助対象として捉えること、子どもと母親が共に長所・変化・成長を確認することができるというストレングスに注目する視点に、独自性があると考える。

今後は、修正した看護援助モデルを用いた実践を積み重ねて有効性の検証を進める必要がある。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 玉木敦子，松岡純子，初田真人，西池絵衣子：自閉症スペクトラム児およびその家族が体験しているストレスと関連要因についての概観，近姫路大学看護学部紀要，査読有，第３号，2010，pp.9-15.

② 松岡純子，玉木敦子，初田真人，西池絵衣子：学齢期にある広汎性発達障害児をもつ母親が体験している困難と心理的支援，日本看護科学学会誌，査読有，Vol.33, No.2，2013.（掲載確定）

〔学会発表〕（計４件）

① 松岡純子，玉木敦子，初田真人，西池絵衣子：学齢期にある広汎性発達障害児をもつ母親が体験している困難と心理的支援，第 30 回日本看護科学学会学術集会，2010 年 12 月 4 日，北海道.

② Sumiko Matsuoka, Atsuko Tamaki, Masato Hatsuda, Eiko Nishiike,: Difficulties experienced by mothers of children with pervasive developmental disorders(PDD) and psychological needs, 10th International Family Nursing Conference, 26th Jun 2011, Kyoto Japan.

③ 西池絵衣子，玉木敦子，松岡純子，初田真人；広汎性発達障害児の体験する困難に関する母親の認知，第 31 回日本看護科学学会学術集会，2011 年 12 月 3 日，高知.

④ 松岡純子，玉木敦子，初田真人，西池絵

衣子：学齢期にある広汎性発達障害児とその母親のストレングスを重視した看護援助モデルの開発,第 32 回日本看護科学学会学術集会,2012 年 12 月 1 日,東京.

６．研究組織

(1)研究代表者

松岡　純子（MATSUOKA SUMIKO）
甲南女子大学・看護リハビリテーション学部・講師
研究者番号：40375621

(2)研究分担者

玉木　敦子（TAMAKI ATSUKO）
甲南女子大学・看護リハビリテーション学部・教授
研究者番号：90271478

研究分担者

初田　真人（HATSUDA MASATO）
近大姫路大学・看護学部・助教
研究者番号：70512656

研究分担者

西池　絵衣子（NISHIIKE EIKO）
天理医療大学・医療学部・助教
研究者番号：90559527